

中国湖北省 三峡ダム・武漢・黄石 旅行記 山本正志



三峡ダム



武漢大学



黄鶴楼

3 / 22 (土) 関西空港 12 : 00 集合で橋本団長以下 15 人が集合。なじみの大西広先生、大森さん、木村汎先生ご夫妻など。13 : 55 離陸、中国東方航空にて上j 毎へ 15 : 35 上海着 国内線乗り換えで武漢へ約 1 時間 20 分。武漢着 専用バスで宜昌へ。まず夕食の時間がないので武漢のレストランで弁当とビールを仕入れて車内で中国最初の食事。野菜の炒め物をのせた丼ものでこれが美味しい。現地時間深夜午前 1 時過ぎ宜昌のホテルの半島飯店着。武漢から宜昌への 300km の高速道路はほとんど車なし。当初の計画では武漢～宜昌は空路の予定だったが出発直前に「飛行機が飛ばない」ということになった。どうやら「乗客数が少ない」という理由で会社が一方的にキャンセルしたらしい。(そんなことってあり!?) おかげで長時間のバスのたびとなり、現地時間深夜午前 1 時過ぎ宜昌のホテルの半島飯店着。

3 / 23 (日) 宜昌半島飯店を出発、三峡ダムへむかう。途中から三峡ダムへの専用道路となるが、ゲート前では大型トラックが何台もとまっている。かなりきびしい積荷の検問があるという。観光バスはフリーパス。ダム建設のために掘削した長いトンネルをいくつも通って開けたところで長江(揚子江)が展開する。「あれが毛公山です」とガイドの劉さん。毛沢東が昼寝をしている形の山がそそり立っている。現地事務所でダム建設にあたった柳さんを乗せて現場へ。ダムは全長 2 3 3 5 km、堤高 1 8 5 m、発電機は 2 6 機とその他に右岸山中に地下発電機 6 機を設置しているという。総発電量は 2 2 4 0 万 kW 時である。

また、大型船のための「シップロック」をダム側面に設置しており、5 段式で大型船を高低差 1 1 3 m をエレベーターのようにパナマ運河方式でダムを通過させる。ちょうど観光船が入るところだった。

ところでダムサイトの見学も航空機搭乗と同様の金属探知機による身体検査も厳しかったが、関係当局の警戒も相当のもので「もしダムへの攻撃が現実のものとなった場合、秘密の基地から 5 分以内に戦闘機が飛来することになっています」とのこと。三峡ダムのパンフレット(1000 円)を買ったが、「戦争による脅威」とあって「万一核兵器攻撃を受けて決壊となっても武漢は大丈夫」と書かれている。これがこの国の現実。

昼食の後武漢へ向かう。途中で伝統を守って製作されている刺繍工場(作業所)に立ち寄る。後日、京都で開かれていたある美術展でお会いした中国の画家に聞いたところ「あの地方独特の刺繍で、作品は



北京でも出回っていますが製作は熟練されたごく限られた職人しかできない」とのこと。作品の値段は 6 0 万円! 荊州古城を視察して武漢へ。武漢シャングリラ泊。



シップロックを通過する船舶

3/24 (月) 午前8時ホテル出発、高速道路を通過して黄石市へ。途中湖の中の道路を通ったが、大西先生も「私も何回も来たがこの道路は初めて」とか。岸ではゆったりと魚つりを楽しむ人たちで「いかにも中国」といった風情。



黄石市役所表敬訪問となっていたがついたのは「磁湖山荘」という黄石市の経営する「迎賓館」。ここで黄石市人民政府副市長の柯俊氏以下市の幹部との歓迎会。双方の挨拶の後、黄石市の概略説明があり、質疑が交わされる。小島衣料の小島社長は現地進出日本企業の代表としていわば「顔役」的存在ということがよくわかった。



続いて湖北児島服装有限公司を訪問。私の郷里岡山県児島市（今では倉敷市）は戦後「学生服の町」として栄えたが、当時昭和30年代、中卒の女性たちが小さな工場でミシンに向かって一心に制縫作業に日夜携わっていたが、その場面を思い浮かべた。しかしここでは製品の品質も現代のモードを取り入れた近代的なシステムでミシンや検査機器にむかって働いていた。この会社の総経理は40代の女性で当初から児島社長と苦楽を共にしてきた大変な努力家ということであった。

<小島社長のお話> 以前と違って、最近では労働力の確保が簡単にはいなくなってきた。一旦上海などに出稼ぎに行っていた若い人たちが今では就労の機会があるということで武漢に帰ってきており、政府の内陸部開発、格差是正の方針で武漢にも企業進出が激しく、賃金が上がってきている。少し技術を身に付けると高賃金に引かれてすぐに転職というのは「中国人労働者の常識」で、もはや「労働コスト面での優位」は現地でも無くなってきている。さらに奥地に進出するか別の手立てを考えるか、以前のように「いくらでも儲かる」ことは今後考えられないということのようだ。

視察の後、副市長を招待して昼食会。午後は児島衣料の新たな企業団地への移転先工場（まだ設備工事中）を訪問。4000人収容の工場は証明設備など準備工事中であったが、今の工場が商業地域に編入され、なんでもマンション業者に高値で（約20倍とか！）転売できるのでその資金で新たな工場が無借金で創業できるということだそう。児島衣料を後にして、大冶鉄鉱視察。巨大な鉄鉱石の露天掘り。しかし今でははるか谷底の掘削現場ではダンプとショベルカーがそれぞれ1台動いているだけ。良質の鉄鉱石の鉱脈も尽きてきているのかもしれない。大冶鉄鉱博物館も視察の後武漢へ。夕食には新たに大連の法円坂法律事務所の中島弁護士が新たに参加、懇談。武漢シャングリラ泊



3/25 (火) 今日武漢大学訪問。大西広先生の関係で経済学部教授の方に話がついて学内を見学させていただくことができるということだった



が、学内に入って案内されてみると、願海良教授（じつは武漢大学党委員会書記・学長よりも上の地位）の歓迎式典が準備されていた。ちょうど桜の季節で学内はお花見の市民も多く（市民は学内に入るには10元の入場料を払う）花見をして、顔鵬飛教授と懇談し、おまけに「学内の食堂で食事をさせてほしい」とお願いしていたところ、大学側の公式招待の宴となった。昼間から学内のレストランで酒宴となった次第。きくと大西先生は旅行が終わった次の日に武漢大学で講演をされるということらしい。



そのこともあって公式招待の宴となったようだ。ところで願海良教授との名刺交換の際、教授が「河上肇記念会の方ですか。わが国でも河上肇の書物で学んだ研究者は多く、文化大革命の後河上肇に学ぶ人は多い」という意味のことを話された。しかも願海良教授は歓迎挨拶の中でも「経済思想にかんする河上肇の本を1970年代に読んだ」と述べられて「日本共産党の元京都市会議員です」と紹介されたこともあり、列席の武漢大学関係者から注目された。

大学を後にして現地の東風本田汽車視察を視察。シビック、SR-Vの2車種を製造しているが特にSR-Vは人気が高く生産も毎年のように増加の傾向が続いているという。工場内は自動化されているが労働コ

ストが安価なために（月1200元程度）ロボットを導入するよりも手作業で組み立てるほうが良いということで日本国内のようにほとんどロボットで自動化、とまではいってないようだったが現場が清潔で労働環境にも配慮されていることがわかった。（少しでも条件が低くなれば技術を身に付けた中国人労働者は別の製造業の企業などへすぐに転職してしまうとは児島社長の話にもあった）



武漢港視察ということで長江の岸壁に向かったが、今では海運（水運）は大きく縮小され、コンテナ船の接岸も極端にすくなくなり見る影もない。聞けば湯水期にはわずか2m程になるという河底を浚渫して1万トンのコンテナ船が山峡ダムを（シップロック）通って上流の重慶までいけるように壮大な計画があるようだが、なにしろすべて国有地、地図上に線を引いて砂利を敷いてアスファルトをおけばたちまち数年で直線の高速度道路が広大な国土を突っ切って出来上がってしまうお国柄、時間的にも陸上輸送に勝負できるのかどうか、私は話を聞きながら正直疑問に思った。

市内にもどり黄鶴楼へと向かったがあいにく5時を過ぎており閉門。掛け合ったが今回はシャットアウト。それではということで向かいの辛亥革命博物館へ。これもなかには入れず、銘茶をいただきながら夕食会場へと向かう武漢シャングリラ泊。



3/26（水）今日は中国史上有名な「三国志」の舞台の赤壁古戦場へ。バスで約3時間。ところが現地へついてみると「三国赤壁古戦場」の大きな看板や「赤壁大戦陳列館」諸葛孔明像など現代の観光のための作品はあったが、肝心の赤壁はどこかと川辺に降り立ってみると、「えっ、これがそうなの！」といった手の届きそうな階段のすぐそばの壁面に小さな字で（それも1mくらいの）確かに「赤壁」とかかっている。しかしその字の隣に浅く掘り込まれた字で古い「赤壁」の字の後が見える。いったい何時、誰が書いたものなのか、「どうも怪しい」とつぶやきながら古戦場を後にした。

< 史実における赤壁 >

208年7月、荊州の牧であった劉表を攻める為、曹操は兵を率いて荊州へ南下を始める。8月、劉表が死ぬと策略により劉表の跡を継いだ次男・劉琮は9月に降伏し荊州を曹操に譲り渡してしまう。孤立した劉備は、長江づたいに南下し、長坂で曹軍に追いつかれるが、何とか難を逃れ夏口へ到達する。そこで劉表の長男・劉琦と合流し、孫権の命で荊州の動向を探りに来た魯肅と落ち合う。曹操は劉備の新野駆逐に伴いそのまま南下し、兵を長江沿いに布陣する。帰営した魯肅の報告によって、その兵百万と聞き孫権は驚愕する。しかし周瑜は、その実は十四、五万しかおらず、兵は疲弊しきっているうえに、疫病も発生しており、勝機はこちらにある、と孫権に説いた。劉備からは諸葛亮、孫権は魯肅を使者として同盟を結び、孫権は周瑜・程普ら数万の水軍を派遣、一方の曹操軍も荊州軍閥の水軍を動員、これを率いて長江を下り、両軍は赤壁に於いて接触し、一戦を交え周瑜らは曹操を撃破、曹操は後退し烏林に陣を張り、周瑜らは長江を挟んで対峙する。孫権陣営の将・黄蓋は、敵の船団が互いに密集していることに注目、火攻めの策を進言した。そして自ら偽りの降伏を仕掛け、曹軍が油断した隙をつき、油をかけた薪を満載する船で敵陣に接近して火を放った。折からの強風におおられて曹操の船団は燃え上がり炎は陸上にまで達し、船団は大打撃を受け、水路を通じて揚州に侵攻することが不可能となった。曹操は敗残兵をまとめて江陵に撤退した。孫権はこれを機に合肥方面の戦線でも攻撃を開始したが、曹操は張熹を救援に派遣すると孫権は即座に撤退した。



ところで、昨日も夕食の時やバスの中で、武漢港視察の時にも大いに議論が沸いていたが、今日も赤壁行きのバスの中で大西先生をはじめ参加者から、「これからの中国の海運や陸運、ロジスティックはどうなる？」「今年1月から労働規正法が施行され、最低賃金制もあり、中国産業と日本など進出企業はどうなる？」といった議論が沸騰した。こうした議論は最後の夕食会となったレストランの食事の場でも引き継がれ、中には中国現地で商売をされている社長さんや元会社役員さんなどからもくわしい現地の状況や中国政府の経済・貿易政策のわかりやすい解説もあり、さすが中国経済ミッション、参加した値打ちがあったと実感した。くわしい解説や分析などは京大上海センターで大西先生が中心となってまとめられており、シンポジウムなども時々開かれているので是非参照いただきたい。

3 / 27 (木) 今日予定の湖北省博物館視察を変更し黄鶴楼に寄った後、武漢空港へと言うことになった。黄鶴楼は湖北省武昌市の蛇山に位置し、黄色い鶴に乗った仙人がここを通ったという伝説からこの名前がつけました。「天下絶景」という美称もあり、湖南省の岳陽楼、江西省の滕王閣と並んで「江南三大名楼」とされている。黄鶴楼は三国時代の呉の時代にあたる黄武2年(西暦223年)当初は軍事目的で建設された。

呉の孫権が「以武治国而昌(武をもって国を治め繁栄させる)」「武昌」もここからきている)を実現させることを目的とし、城を守り眺望をよくするためであった。唐代になり、軍事性質から徐々に名所へとその意義が変わり、歴代の文人墨客がこぞってここを訪れ、今もよく知られている詩を残した。唐代の詩人・崔顥は伝説の仙人を偲んだ詩「黄鶴楼」で、「昔人已乘黄鶴去、此地空余黄鶴楼。黄鶴一去不復返、白雲千載空悠悠。晴川歷歷漢陽樹、芳草萋萋鸚鵡洲。日暮鄉關何處是、烟波江上使人愁」と詠み、この詩は長年にわたって愛され、黄鶴楼の名声をさらに高めた。周囲には、勝象宝塔、碑廊、山門などの建築物があり、いずれも独特の民族的な雰囲気を持っている。



その後、武漢空港へとむかい、13:30に離陸、上海空港着は15:00。上海空港発は18:00、関西空港に21:00無事到着、深夜の帰宅となった。近代的ホテルと残された密集住宅地。上海は(中国は)ものすごい勢いで市部の「近代化」が進められている。

中国における労働契約法の改正

中国の労働契約法が08年1月から施行されました。契約期間、実質的な退職金制度、労働組合など主な改正点について概略は以下のとおりです。

中国の労働契約法は、労働者に不利なこれまでの法律体系が「常識的」に整備されたに過ぎないような内容だが、既存の労働契約を前提に事業運営をしてきた外資企業には、計画の見直しを含めた検討を要する内容も少なくない。

1 契約期間

これまでは期限付き労働契約で期間満了の度に更新契約可能であったが、今回の改正では同一企業に勤続10年以上勤務する従業員が、無期限の労働契約を求めた際には拒絶できない、又、期限付き契約の更新は2回までで、3回目の更新から、従業員の求めがあれば無期限の労働契約で更新しなければならない。要は終身雇用を前提とした労働契約に変えていこうという姿勢であり、企業とすれば就業規則で「具体的解除項目」を検討した上で明示しておく必要が生じる。

企業が意図的に雇用はしたが、その後1年間、労働契約を締結していない場合には無期限の労働契約を締結したものと見なされる罰則規定も明示された。

2 経済保障

労働契約が終了(退職時)した際には、勤続1年で1ヶ月の賃金の支払義務が生じ、2年で2ヶ月、3年で3ヶ月...というように実質的な退職金支給制度ができた。但し、最高限度は12年を超えないという規定や、高賃金の従業員の退職時には会社が所在する地域の平均賃金の3倍を超えない金額とするといった制限規定もある。

3 集団契約と労働組合

外資企業に勤務する労働者からの求めがあれば労働組合(工会)の結成を会社は容認し、工会活動費(労働者の実際賃金総額の2%)の支給が義務付けられる。

労働者搾取の現実から常識的な労使関係に移行させようとする背景が見られるが、中国企業が積極的に労働法遵守の姿勢を貫くかは、今後の動きを見なければならない。しかし外資企業は当然遵守せざるを得ず、契約社員、臨時工等が事業運営の要としてきた企業には、打撃となるところも増えていくだろう。

チベット問題を正しく理解するために ・中国における少数民族問題とは何か

大西 広京都大学教授

4月24日日中友好協会京都府連主催の大西広氏の講演会の講演要旨を紹介します。(文責 山本正志)

今回暴動にまで発展したチベット問題について、大西氏は「私がいいたいのは、暴動は適切な政治主張を表現する手段ではないが、そこまで彼らが怒っているという理由を率直に議論する必要がある」と指摘。中国における少数民族問題の敏感さと複雑な歴史的・政治的背景として、新疆ウイグル自治区の例や、中国国内でも民族問題が殆どない延辺朝鮮族自治州、寧夏回族自治区などの例をあげた。

中国政府の少数民族政策について

漢族には「一人っ子政策」がとられているが、チベット族については他の少数民族より緩い人口制限策がとられており、このために漢族から少数民族に鞍替えする人もいる。10人の子供を生んでも罰せられない人もいる。さらに、子どもを減らすと追加の補助金も、火葬の強制もされていない。その上、税金の減免税、学校教育費の減免除、高校・大学の優先入学(下駄をはかせる)、公務員試験の優遇策(これも試験の下駄)、公務員の出世上の優遇、自治区外への旅行にも補助金など。

その他の農牧民支援政策として、チベットの農牧民の平均収入は5年連続で二桁成長し、07年には2788元に。過去5年の「三農」(農業・農村・農民)予算も前期比2.3倍の165億元に。07年には農村部住民の生活保障制度が発足。年収800元未満の農牧民はすべて対象となり、23万人が恩恵に。農牧区の「五保戸」(衣・食・住・葬儀・未成年者の教育が保障された世帯)扶養基準は02年の588元から昨年は1500元に。

さらに、経済開発の進展は統計資料でみると、チベット自治区の財政収入が256億元であるのに対し国家財政補助が201億元(2006年)と大半を占めていることをみてもかなりの優遇策がとられていることがわかる。

本当に問題となっていることは何か

チベット族や新疆ウイグル自治区とちがい、延辺朝鮮族自治州、寧夏回族自治区などをみると少数民族が漢族より高い経済的地位にいたり、あるいはほぼ同等の地位にいたるために「少数民族問題」は発生していない。つまり、今回の不満の爆発=暴動などは経済問題と理解すべきである。(大西氏の現地フィールドワークと統計資料から)

チベットの場合は「チベット族はより熟練した技術を持った中国人(漢族)移住者にはかなわないために、世界の屋根で起こったグローバル化の勢いに押されて、ますます隅に追いやられてきている。経済ブームに便乗しようとチベットに流入して来る中国人移住者によって、ますます多くのチベット人たちが、職を奪われている」(ダライラマ日本事務所ウェブサイトから)こうした傾向は青蔵鉄道(チベット鉄道)の開通、観光客の大量流入、観光資本の進出で一層激化しており昨年のNHK「激流中国」シリーズでも報道された。

また、チベットやウイグル族における言語の問題も、新疆大学で存在した完全二重言語授業が今は基本的に全授業が基本的に漢語授業へと転換されている。雇用の面でも、国有企業に存在した「民族均等雇用」の原則が民営化で解体している。

チベットと中国革命政権とのかわりかかわりでいえば、解放軍の進駐により「政教分離」と農奴制の土台からの「解放」が実現した。おぞましい農奴制からの解放が解放軍進駐の正当性の根拠とされている。ダライラマ14世はこの直接かつ最高の責任を負っている。(中華人民共和国は、旧チベットがダライ・ラマを頂点とする僧侶、貴族の専制による封建農奴制社会であり、チベット仏教の寺院では農奴を人身御供にする習慣があったと主張している)

(<http://japanese.china.org.cn/ri-xizang/4.htm> に参考資料あり)

「オリンピックの政治利用」については、・これを機にボイコットや聖火の妨害というのは政治利用 ・それを見越して暴動を準備したというのであれば、それも政治利用 ・しかし、「国威発揚」なども政治利用なので「政治と無関係なオリンピック」を想定すること自体は社会科学的ではない。・しかし、たとえば、優勝台に国旗を掲げない、国家混合チームの編成など「国家」と独立なオリンピックを構想することも必要ではないか。との主張がなされた。

チベット問題に関しての大西氏の提案

中国政府は・少なくとも外国人の取材を自由化すべき。・暴動参加者に対する一晩暴動の原因となった現地漢族企業家などの処罰、資産の没収。・農奴制廃止後の農業改革に行き過ぎがあったことを「チベット問題」の一部として明確に認めること。・それらによってダライラマとの話し合いへの障害を取り除くこと。

ダライ・ラマへの提案としては、・暴動参加者を仏教指導者として厳しく諫めるなど「暴力反対」の姿勢を明確にすること。・「オリンピックへの協力」の姿勢をさらに明確にすること。・過去のCIA やオウム 真理教との関係、過去の農奴制への責任について清算すること。・チベット仏教の女性や屠殺労働者への差別思想やあまりに非科学的な教義の改革も必要ではないか。「自治権拡大」で実際にしたいと考えている具体的な内容を示し、それへの不安を解消する必要もあるのではないか。（「外交と防衛を除いた主権の確立」がダライ・ラマ亡命政権の要求といわれている）

大西氏は4月27日のNHK日曜討論でも見解を表明、注目を集めた。